

08, 11, 20

世界が尊敬した日本人(38)

世界を股にかけた報道写真家・岡村昭彦

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

「南ベトナム政府軍兵士が農民に水責めの拷問を加えるシーン」など—ベトナム戦争の実態を告発する9頁のスクープ写真が米写真週刊誌「LIFE」(1964年6月12日号)に掲載され、『第2のロバート・キャパが生まれた』と編集後記で絶賛された。

報道写真家・岡村昭彦のデビュー作であり、一躍、その名は世界にとどろいた。



この写真の事前情報をつかんだラスク米國務長官は「ライフ」に載せないように圧力をかけた。

ライフ側は岡村のネガを全部回収して、「やらせ」がないかどうか1枚1枚をすべてチェックし、ないことを確認して、一挙に掲載した。この「ライフ」をみたニクソン副大統領は床にたたきつけて、怒り狂ったといわれる。

「LIFE」は当時、約八百万部の世界一のグラフ雑誌で、世界のカメラマン、ジャーナリストはこの雑誌を目指してしのぎをけつており、翌 65(昭和 40)年、岡村は世界が注目していた解放民族戦線副議長との会見に初めて成功し、この年 36 歳で「米海外記者クラブ最優秀報道写真年度賞」に輝いた。

日本で出版した「南ヴェトナム戦争従軍記」(岩波新書)がベストセラーになるなど、世界のメディアをベトナム戦争にひきつけた。

岡村は1929(昭和 4)年1月、東京で海軍大尉の長男として生まれた。家系には日本赤十字創設者の佐野常民、東大病理学の権威・緒方知三郎がいる名門の出であった。

東京医専(東京医科歯科大)を中退し、北海道のトラピスト修道院で1年半過ごした。敗戦後の飢えと戦いながら、一家を支え米軍相手のヤミ商売で英語力を養い、部落解放運動や、炭鉱の生活に身を投じて週刊誌記者となった。



それまでカメラは嫌いだったが、写真こそ世界共通言語であるとして 34 歳で通信社の契約特派員となり、ベトナム戦争の取材に向かった。

「今、人間はどこに立っているか」をテーマにフリーランスとして追い求めた岡村の出発点は殺される側のベトナム・ジャングルであり、そこから問題をより深く広く掘り下げた。

静岡県浜名湖の舞阪の実家と、殺す側のケネディー米大統領のルーツをたどって、アイルランド・ダブリンに生活の拠点を移して世界を二眼レフで歴史的な視座から記録していった。

1968 年には世界の紛争地を回り、アイルランド紛争やアフリカ・ビアフラの独立戦争による飢餓や内戦を取材、中南米にもいった。国内では水俣病や地元浜名湖の水質汚染を防ぐ公害反対運動を支援し、地球環境問題に取り組んだ。

その点で岡村は写真ジャーナリストを超えた、市民運動のリーダーであり、知の冒険者であった。ダブリンやロンドンの図書館で独学で勉強し、訪れた世界中の古本屋からも膨大な海外古書を集めて、その数1万2千冊(うち4千冊が洋書)となった舞阪の書庫を「人民文庫」と命名し、世界を変革するための知識庫として解放した。

ベトナム戦争で米軍が使用した「枯葉剤」(ダイオキシン)の影響の問題意識から1980(昭和 55)年 51 歳で「バイオエシックス」(生命倫理学)について関心を深めて、ジョージタウン大学教授・木村利人と二人三脚で全国講演し、医者や看護婦たちと勉強会を立ち上げて、この分野での先駆的な活動と執筆を行った。

さらに、岡村の眼は病院における患者の人権、看護ケア問題、死んでいく人間としての権利と、それを看取る側からの死にいく者をケアするホスピス運動へとたどりつく。



世界のホスピス運動は1967年のロンドンのセント・クリストファー・ホスピスの設立がはじまりだが、世界各地のホスピス運動を取材して、54歳となっていた岡村は1983年から日本で初の「ホスピスへの遠い道」の連載を始めた。

日本で初めてのホスピスの研究書である。

↑ 静岡県立大学図書館誕生した岡村文庫 >

エネルギーに世界の難問に単独で挑み続けた岡村は無理がたたったのか、1985(昭和60)年3月、敗血症で56歳の若さで急逝した。

岡村に対して、『世界を揺るがした十日間』のジョン・リードや、ジョージ・オーウエル、エドガー・スノーらに匹敵する世界的ジャーナリスト』という高い評価があるが、30年後の今、日本でやっと論議されている高齢者の看護やホスピス問題を見るにつけ、岡村の目ががどんなに時代に先駆けていたかがわかる。